

本法寺

[茶とアート]

本法寺は、仏教日蓮宗の京都における最も重要な寺院のひとつです。1436年に創建され、1587年に現在の地に移転したこの寺院の現在の建物は、18世紀後期まで遡ります。この寺院は、その宗教的重要性以外にも、芸術コレクションと庭園で有名です。

本法寺にある芸術的至宝のほとんどは、日本で芸術が大いに栄えた16世紀後半の最も著名な巨匠の1人に挙げられる絵師・長谷川等伯（1539～1610年）の作品です。等伯は、本法寺を主たる住まいとしていた京都で、最も評価の高い作品のほとんどを制作しました。

本法寺で最も目を引く等伯の絵は、おそらく史実に基づく釈迦の死に関する自身の解釈を描いたものでしょう。この10 x 6メートルの巻物には、題材となっている釈迦が、死を嘆く大勢の人や動物に囲まれて静かに横たわる様子が描かれています。この作品は、6年前の息子の死に深く影響を受けた、当時61歳の絵師の個人的な苦悩を反映していると言われています。この絵の複製は1年を通して本法寺で観覧することができ、真筆は毎年3月中旬から4月中旬まで展示されます。

また、本法寺は本阿弥光悦（1558～1637年）とも所縁があり、本阿弥家は日蓮宗の熱心な信者で、この寺院の檀家でした。光悦は、日蓮宗の教えの根底をなす法華経になぞらえて、蓮の花が咲く池を中心とした、本法寺の中庭「巴の庭」を作庭しました。